

ボランティア活動 一人を育て、まちづくりの基本

東日本国際大学福祉環境学部准教授 遠藤 寿海

「ボランティア」と聞いて、どんな活動を思い浮かべるだろう？ 福祉施設でのボランティア、災害救援、地域の環境整備、国際協力等々。ボランティアの範囲は広い。1995年に起きた阪神淡路大震災では多くのボランティアが現地に駆けつけ、救援活動が行われた。日本ではこの年がボランティア元年とされ、以来、ボランティア活動に参加する人や団体も飛躍的に増え、ボランティア活動は私たちの生活を支えるひとつの方法として、確実に社会の中で位置づけられてきている。

実際、既存の制度では解決できない課題や制度の狭間にある課題を解決するための地域活動に対し、国からの補助が行われるような時代になった。いまや、ボランティアは元々の理念である、自発性に基づいて利他性や先駆性を求める個別の活動以上の拡がりをもつ概念となりつつある。この地域活動を「まちづくり」と置き換えて、ボランティア活動との共通性を見ていくことにしたい。

「まちづくり」とは何か？ と問われた時、自然環境整備や防災・防犯活動、地域の活性化活動などを通して、「暮らしやすさ」を追求していくことではないか、と考える人は多いだろう。確かにその通りである。しかし、そこで肝心なのは、活動そのものを作り出す「人」の存在である。そこにボランティア活動との共通性を見出すことができる。

公共のサービスの充実は別として、「暮らしやすさ」は国や制度がわざわざ作ってくれるものではない。私たちは私的なつながりの中で、自分らしさや暮らしやすさ、生きがいや生きる力を得ることが多い。ボランティアには自発性、利他性、無償性、社会性という性格が求められているが、まちづくりにも自発性、社会性という共通点が見出せる。無償性という点でも、ボランティアは

参加者の精神的成長や充足感までを否定するものではなく、同様に、まちづくりに参加する人々の「自分たちのまちを良くしよう」という思いが自己中心的と捉えられることもない。社会的な貢献という大きな意義を持つからである。

例えば、学校の空き教室を活用して子どもから高齢者まで、世代を超えた交流の機会を産み出す、という活動などは、まさしくボランティア活動であり、まちづくりであると思われる。このような場を作り出すことだけがボランティアなのではない。実は、この場に参加してくる人の中にはボランティアをしているという意識など持たないなかでボランティアをしていると言える。交流を通して子育て支援や高齢者の見守りが出来ているということは、子どもも大人も障がいのある人も、そこに参加している人自身が無意識のボランティア活動家と言えるのではないだろうか。また、このような場は、地域の人たちが地域全体で支えあい、互いに暮らしやすいようにしていこうという気持ちから作られるものであろう。これこそ、まちづくりの基本であるとも言える。

ボランティア活動にもまちづくり活動にも、人を育て、人と人との絆を強める力がある。人づくり（人としてのあり方を問い直し、自己実現していく）、関係づくり（人と人の支えあいの力を作り出す）がその根本にあるからこそ、ボランティア活動の土台となる支え合いの気持ちが育てられていくのであろうし、単なる住所地としての「町」が「私たちの住むまち」になっていくと言えるだろう。